

2017年6月の第12回研究大会・総会において会長に就任した岩井です。私は、2005年の設立準備委員会にも出席し、本学会の成長を見届けてきました。それから12年がたち、本学会自体も、研究大会や『ピューリタニズム研究』を通して独自の歩みをとげ、豊かな成果を上げてきたと言えるでしょう。「このたび、研究者の知的交流によって研究上の成果や情報をわかち合い、同学の交わりを深めつつ研鑽の推進をはかりたく願い、ここに「日本ピューリタニズム学会」を設立することになりました」という本学会の設立宣言は、いささかも色あせていません。この宣言を出発点に、今後の学会活動にとって重要と思われる三つの課題を、私なりに考えてみました。

私は、先輩や同僚の先生方が築いてきた、この「知的交流」の理念を継承し、さらに発展させることが、今後の学会運営にとって不可欠と思います。本学会が立脚する学問分野は、哲学、倫理学、神学、歴史学、文学、思想史学、社会科学とまことに多様であり、様々な分野を研究する研究者が集っています。そうした異質な研究者が、ピューリタニズムやキリスト教の研究を通して交流し、実り豊かな「対話」を実現することが、本学会の目指すところと言っても過言ではありません。これを推し進めることは、第一の課題です。

こうした学問間のインターディシプリナリーな「対話」以外にも、本学会には特色があります。それは、これまでの学会活動において、ピューリタニズム発祥の地イングランド、飛躍の地となったアメリカ、英米から学んだ近代日本という三地域を、常に念頭に置いてきたことです。英米と日本は、今後も、ピューリタニズム研究の基盤となる重要な地ですが、さらにスコットランドやアイルランド、オランダといったイングランドの周辺にあって、ピューリタニズムに影響を与えてきた地域も対象とする必要があるでしょう。また、19世紀以降、ピューリタニズムは幅広く東アジアにおいて布教されたという事実を念頭に置き、中国や朝鮮と比較しながら日本の特徴を探るといったテーマもあると思います。ピューリタニズムを軸にしなが、それを受容した諸地域を結び付け、比較し、地域間の「対話」をはかることは、第二の課題となるでしょう。

学問間の「対話」、地域間の「対話」に続き、第三の課題とも言うべきは、宗教間の「対話」です。2017年の第12回研究大会でも、「ピューリタニズムとイスラームの対話」というシンポジウムを開催しました。これまで、本学会は、ピューリタニズムやキリスト教の研究を通して、それらが歴史的にも、社会的にも、現実的にも多大な影響力をもち、宗教が重要な役割を果たしたことを示してきました。しかし、今日、様々な理由から宗教に対する偏見が助長され、とくに日本では「宗教離れ」の傾向が顕著だと思えます。こうした潮流にあって、キリスト教にとどまらず、ユダヤ教やイスラーム教、仏教といった他宗教にも向き合い、それらとの「対話」を通して、ピューリタニズムやキリスト教の特色を探り出し、宗教の社会的役割を再発見する作業も残されていると思えます。

これらの課題は、実際には、従来の学会活動において、すでに達成されたり、先鞭を着けたりしています。学会員の皆さんと協力しながら、それらを一層推し進めることができないかと期待しています。どうぞ、二年間、よろしく願いいたします。